

# 『 On-line みんなで法華經を学ぼう! 』 vol.16

Jul. 2023

— Let's embark on a journey to discover our own "perspective on the Lotus Sutra".  
(みんなで“法華經觀”を見つける旅に出よう)

## 『妙法蓮華經 見宝塔品 第十一』 (迹門・流通分)

○『又如來の滅度の後に、若し人あって妙法華經の乃至一偈・一句を聞いて一念も隨喜

せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)

○『其の習學せざる者は 此れを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)

○「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

(『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たり』) (法師品 二〇九頁三行)

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくこ

とを得たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)

○『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、  
りっぱな精進といえる』 (『新釈法華三部經 第一卷』 P8・8行/P5・1行)

※ 表記 例：(P353・1行/P259・7行) ⇔ (『新釈・文庫版』頁数/『新釈・単行本』頁数)



### 《法師品の復習》

・迹門の流通分 (P217・終2行/P169・6行)

・素直な感動 一念隨喜 (P221・終3行/P172・終2行)

『咸く佛前に於て妙法華經の一偈一句を聞いて、乃至一念も隨喜せん者には我皆記を與え授く』

(二〇二頁 四行)

・隨喜を伸ばす修行と供養 (P224・終3行/P174・終2行)

・五種法師 (P231・5行/P179・終2行)

『是の諸人等は已に曾て十萬億の佛を供養し、諸佛の所に於て大願を成就して、衆生を愍むが故に此の人間に生ずるなり』 (二〇三頁 一行)

・貧者の一灯 (P235・終6行/P183・終6行)

・心と行ないは循環する (P240・7行/P186・1行)

『法華經の乃至一句に於ても受持・讀誦し、解説・書寫し～ 是の人は一切世間の膽奉すべき所なり、如來の供養を以て之を供養すべし』 (二〇三頁 五行~八行)

『衆生を哀愍し願って此の間に生まれ、廣く妙法華經を演べ分別するなり』 (二〇三頁 終四行)

・願生

(P246・終2行/P191・2行)

『是の人は自ら清淨の業報を捨てて』 (二〇三頁 終二行)

『我が滅度の後、能く竊かに一人の爲にも法華經の乃至一句を説かん。當に知るべし、是の人は則ち如來の使なり。如來の所遣として如來の事を行ずるなり』 (二〇四頁 一行)

・人に依らず法に依れ (P253・終2行/P196・6行)

・法は人によって興る (P254・6行/P196・終3行)

『若し惡人あって～ 現に佛前に於て常に佛を毀罵せん～ 在家・出家の法華經を讀誦する者を毀謗せん、其の罪甚だ重し』 (二〇四頁 四行)

『其れ法華經を讀誦すること有らん者は、當に知るべし、是の人は佛の莊嚴を以て自ら莊嚴するなり。則ち如來の肩に荷担せらるることを得ん』 (二〇四頁 七行)

・仏さまを礼拝する時の心がまえ (P281・6行/P217・終5行)

『我が所説の諸經 而も此の經の中に於て 法華最も第一なり』 (二〇六頁 終行)

『此の法華經最も爲れ難信難解なり。藥王此の經は是れ諸佛の秘要の藏なり。

～ 諸佛世尊の守護したもう所なり』 (二〇七頁 二行)

『他人の爲に説かん者は、如來則ち衣を以て之を覆いたもうべし』 (二〇七頁 六行)

『是の人は如來と共に宿するなり。則ち如來の手をもって其の頭を摩でたもうを爲ん』

(二〇七頁 終四行)

・仏と共にあり！

(P300・4行/P232・3行)

・仏の深い信頼 (P300・終3行/P232・8行)

『此の中には已に如來の全身います』 (二〇七頁 終行)

・如來の全身います (P302・終6行/P234・2行)

・高原穿鑿の譬え (P314・2行/P242・6行)

・衣・座・室の三軌 (P328・2行/P253・終6行)

法師品の要点「如來の室 (大慈悲心)」「如來の衣 (柔和忍辱)」「如來の座 (一切法空)」

『如來の室に入り、如來の衣を着、如來の座に坐して』 (二〇九頁 終行)

・慈は共に楽しみたい心 (P330・5行/P255・2行)

・悲は苦を同感する心 (P331・終5行/P255・終2行)

・空を積極的に悟る (P344・4行/P264・終4行)

『我餘國に於て、化人を遣わして其れが爲に聽法の衆を集め』 (二一〇頁 四行)

『空閑の處に在らば～ 阿修羅等を遣わして其の説法を聽かしめん』 (二一〇頁 七行)

『若し此の經に於て句逗を忘失せば、我還つて爲に説いて具足することを得せしめん』

(二一〇頁 終四行)

『是れ諸經の王なるを聞き 聞き已つて諦かに思惟せん 當に知るべし此の人等は佛の智慧に近づきぬ』 (二一一頁 五行)

『人あって惡口し罵り 刀杖・瓦石を加うとも 佛を念ずるが故に忍ぶべし』 (二一一頁 終三行)

・仏を念ずるとは (P362・6行/P279・1行)

①「自分は仏さまの代わりに仏さまの仕事をしているのだ」と、その行ないの本質を思いだす。

②「仏さまのお仕事をしている以上、必ずご加護がある」と仏さまとの一体を確信することです。

『若し法師に親近せば 速かに菩薩の道を得 是の師に隨順して學せば 恒沙の佛を見たとまつることを得ん』 (二一二頁 終二行)



## ＜見宝塔品のあらすじ＞

【七宝(しっぽう)で飾られた巨大な塔が地中から現われ、空中に浮かび立つ】――

【二―三頁 一行】 仏滅後、法華経を説き実践する者が得る功德。そして、その者を仏が守護することが説かれ、それを伺った一同は、大きな感動を覚えました。

すると高さ五百由旬(ごひゃくゆじゆん 約500km)、広さ二百五十由旬(約250km<sup>2</sup>)に及び巨大な七宝(しっぽう)の『宝塔』が、／(『地より涌出(ゆじゅつ)して空中に住(じゅうざい)す』)突然、大地から現われ、空中に浮かび、そびえ立ったのでした。その塔は様々な宝物で装飾されています。五千を数える欄干(らんかん)があり、壁には千万にも及び厨子(ずし)が設(しつら)えられています。無数の幟幡(のぼりばた)がたなびき、宝石をちりばめた飾りが垂れ下がり、美しい音色の鈴が万億かけられ、四方から多摩羅跋栴檀(たまらばつせんたん)というお香が放たれて世界中がかぐわしい香りに包まれました。宝塔の旗や天蓋(てんがい)は七宝(しっぽう)、すなわち金・銀・瑠璃(るり)・砗磲(しゃこ)・瑪瑙(めのう)・真珠・玫瑰(まいえ)という七つの貴金属・宝石で作られ、高さは帝釈天など守護の四天王がいる四天王宮という天界にまで達しています。

【二―三頁 六行】 三十三のバラモン教の天の神々は、天から曼陀羅華(まんだらけ)という大変美しい花々を降り注ぎ、宝塔に供養しました。またその他の神々や龍、乾闥婆(けんたつば)・阿修羅(あしゅら)など鬼神、そして人間と人間以外のあらゆる生あるものが花や香、宝石の飾りや天蓋(てんがい)や旗を奉納し、さらに音楽などを奏(かな)でて供養し、うやうやしく恭敬(くぎょう・敬い)、尊重(そんじゅう・尊び)、讚歎(さんたん)しました。

【宝塔から多宝如来が大音声(だい おんじょう)で、真実を説く釈尊を証明・讚歎】――

【二―三頁 終二行】 その時、宝塔の中から大地を揺るがすほどの大音声(だいおんじょう)が響きわたりました。それはお釈迦さまの説法をほめたたえる言葉でした。

(『善哉(ぜんざい) 善哉。釋迦牟尼世尊、能(よ)く平等大慧(びょうどうだいえ)・教菩薩法(きょうぼさつぽう)・佛所護念(ぶつしょごねん)の妙法華経を以(もつ)て大衆(だいしゅ)の爲に説きたもう。是(か)くの如し、是の如し。釈迦牟尼世尊所説(しよせつ)の如きは皆是(みなこ)れ眞實(しんじつ)なり』)

「素晴らしい。誠に素晴らしい。釈迦牟尼世尊が説かれた教えは、すべての衆生が平等に仏性を持って等しいことを説く『大智慧の教え』(平等大慧)であり、すべての人に『菩薩の道を示す教え』(教菩薩法)であり、『諸仏が最も大事に護ってきた教え』(仏所護念)である『妙法蓮華経』を人々に説かれました。誠に釈尊の説かれることはその通りです。その通りです。釈迦牟尼世尊の説く教えは眞理そのものであります」と釈尊を讚歎し、釈尊の教えが眞理そのものであると証明する言葉が響きわたったのでした。

【二―四頁 二行】 その時、法会(ほうえ)の座にいた在家・出家の男女の修行者など聴衆は、大宝塔が空中に浮かんでいる情景を仰ぎ見て、また宝塔から発せられた大音声(だいおんじょう)を聞いて言い知れぬ感動に満ちあふれました。そして今までに見たことも聞いたこともない経験でしたので、不可思議な思いになりました。全員が座から立ち上がり、宝塔に向かってうやうやしく一心に合掌し、その場は敬虔(けいけん)な雰囲気(ふんぎ)に包まれました。

【大樂説(だいりやくせつ)菩薩が、宝塔の出現の理由を釈尊に尋ねる】——

【二一四頁 四行】すると、この世のすべての天人や人間、鬼神など生きとし生ける者がこの大宝塔を見て不可思議に思い、驚き、なぜこのようなことが起こったのかの意味を図りかねているのを感じ取った大樂説(だいりやくせつ)菩薩は、すぐさま世尊にお尋ねをしたのでした。

「世尊よ。どのような理由でこの宝塔が大地から湧(わ)き出(い)で、そして大音声(だいおんじょう)が発せられたのでしょうか」

【釈尊が宝塔出現の理由を答える。『多宝如来の大誓願』】——

【二一四頁 七行】この質問を受けて、世尊がお答えになりました。

(『此の寶塔(ほうとう)の中(うち)に如来の全身(ぜんしん)います』)「じつは、この宝塔のなかには如来の全身(ぜんしん)がいるのです。その如来ははるか昔、無量千万億阿僧祇(あそうぎ)という数多くの国を持つ東方世界の中に『宝淨(ほうじょう)』という国があり、そこに『多宝(たぼう)』という如来がいました。／(『大誓願(だいせいがん)を作(な)したまわく』)その如来は菩薩の時代に大誓願を立てていました。その誓いとは『自分が成仏したあとこの世を去り、そののち十方世界のいずれかで法華経が説かれることがあれば、／(『其(そ)の前に涌現(ゆげん)して、爲(ため)に證明(しょうみょう)と作(な)って、讚(ほ)めて善哉(ぜんざい)といわん』)その法華経を聴聞(ちょうもん)するためにそこに大塔を現わし、そしてその教えが真理であることを証明し、讚えよう』という誓いでした」

【二一四頁 終行】「そしてその如来が悟りを得て、そののちこの世を去る時、如来は天上界・人間界の多くの比丘に向かって告げたのでした。『私が滅度したのち私の全身を供養しようと思うならば、大塔を建てなければならない』と。そしてその如来は自由自在な神通力を持っているために、十方世界のいかなる所で法華経が説かれると、如来はそこに宝塔を湧(わ)き出(い)でさせ、『素晴らしい。誠に素晴らしい。善(よ)い哉(か)な、善(よ)い哉(か)な』と『妙法蓮華経』を説く仏を讚歎(さんたん)するというものです」

「そのようなわけで、今こうして多宝如来は法華経を聴聞(ちょうもん)するために地中から宝塔を現わし、そして『善(よ)い哉(か)な、善(よ)い哉(か)な』と大音声(だいおんじょう)を発せられたのです」

【多宝如来の姿を拝すことを釈尊に願う】——

【二一五頁 六行】すると大樂説菩薩が、釈迦牟尼世尊の神通力にすがって次の願いを申し出たのでした。

「世尊よ。お願いがございます。願わくは多宝如来のお姿をこの目で拝見したいと存じます。多宝如来のお姿をお現しいただきたく存じます」

【姿を拝すための条件。“十方分身仏を集める”『多宝如来深重の願』】——

【二一五頁 八行】すると世尊が大樂説菩薩にお答えになりました。

「この多宝如来にはもう一つ重大な願があります。それは法華経を聴聞するために宝塔が出現した時、出家・在家の男女の修行者をはじめ人々の前に如来自身の姿を現すためには、／(『彼(か)の佛の分身(ふんじん)の諸佛十方世界に在(ましま)して説法したもうを、盡(ことごと)く一處(いっしょ)に還(かえ)し集めて、然(しかう)して後(のち)に我が身(み)乃(すな

わち出現せんのみ』十方世界のあちこちで釈尊の代わりとなって法を説いている分身仏(ふんじんぶつ)をことごとく呼び返し、一か所に集めた上でなければ多宝如来は身を現さないという願いです」とお答えになりました。

【二一五頁 終行】そして世尊は仰(おお)せになりました。  
「大樂説よ。十方世界で説法する私の分身の諸仏を、今、ここに集めましょう」

【二一六頁 一行】大樂説菩薩は喜んで申し上げます。  
「世尊よ。どうぞお願い申し上げます。私どもは世尊の分身仏を拝したてまつり、礼拝(らいはい)し供養申し上げたく存じます」

### 【釈尊が眉間白毫相で光を放ち、“十方世界の分身仏を招来” 東方の国の様子】

【二一六頁 二行】世尊は大樂説菩薩ら一同の願いを聞き届けられ、眉間の白毫(びやくごう)から一条の光を放ちました。すると東方にある五百万億那由恒河沙(なゆたごうがしゃ)等の無数の国土にいる釈尊の分身仏を照らし出されました。それらの国土は一面に頗黎(はり・水晶)が敷き詰められ、宝の木々が立ち並んでいます。そして宝石が縫い付けられた布飾(ぬのかざ)りや宝石が散りばめられた横断幕で装飾され、その上を宝石で作った網で一面を覆(おお)っています。

その国の諸仏は、美しい声でさまざまな教えを説かれています。また無量千万億という無数の菩薩たちがあらゆる国々に満ち満ちており、大衆のために説法されている姿が目に見えます。そして世尊の白毫(びやくごう)から放たれた光が、次々に南へ西へ、また北、四維(しゆい・東北、東南、西南、西北)、上下の世界へと照らし出されると、それぞれの世界の国土で同じような情景が現われ、目に見えるのでした。

### 【十方分身仏が多宝如来を讃歎。娑婆世界が清浄になる】——

【二一六頁 九行】その時、十方の諸仏は、それぞれの国土において菩薩たちにお告げになったのでした。

／(『善男子、我今(われいま)娑婆世界の釋迦牟尼佛の所(みもと)に往(ゆ)き、并(ならび)に多寶如来の寶塔(ほうとう)を供養すべし』)「善男子よ。私はこれから娑婆世界(地球)におられる釈迦牟尼世仏のみもとへ行き、多宝如来の宝塔を供養します」

／(『時に娑婆世界即(すなわ)ち變じて清浄(しょうじょう)なり』)すると不可思議なことに、娑婆世界がたちまち一変して、清浄な世界となりました」

### 【人々が無我の心になった世界の様子】——

【二一六頁 終二行】一変した娑婆世界のありさまは、地面は瑠璃(るり)という宝石で敷き詰められ、宝石のように美しく輝く木々が立ち並んでいます。四方八方に広がる道はすべて黄金の縄で縁(ふち)取られ、村や町や都会、そして海、川、山、森林などはありません。すべてかぐわしい香りに満ち、天の美しい花々が大地を覆(おお)い、宝石で作られた幔幕(まんまく)や網が一面に張り巡らされています。そして宝石の鈴からは、美しい音色が響き渡っています。



【**真実を聞こうとしない者は、この法会の場にはいない。“他土に置く”**】——

【二一七頁 二行】すると、この法会の場にいる者たちだけを残して、／（『諸（もろもろ）の天・人を移して他土（たど）に置く』） この場におらず、教えを聞いていない娑婆世界の天上界・人間界のすべての人たちを、他の世界へ移してしまいました。

【**十方分身仏が娑婆世界に参集**】——

【二一七頁 三行】その時、**十方の諸仏**は一人ずつ大菩薩を侍者として引き連れて娑婆世界に來られました。そしてそれぞれが宝石の木（宝樹）のもとにお座りになりました。これらの宝樹は高さが五百由旬（ごひゃく ゆじゅん）というとても高い高さがあり、枝・葉・花・実が順次美しくなっています。そしてその宝樹の下には、五由旬（ご ゆじゅん）という高さの獅子の座があり、美しい宝石で装飾されています。

【二一七頁 六行】その時、諸仏は獅子座に着かれ、結跏趺坐（けっかぶざ）されました。そして順次着座する尊い諸仏のお姿は、三千大千世界のすべての世界中に行き渡ったのでありましたが、釈迦牟尼世尊の化身はまだ娑婆世界には来ていませんでした。

そこで釈迦牟尼仏はご自身の分身仏を迎え入れるために、八方の百万億那由他（なゆた）という無数のすべての国々を清浄の寂光土の世界に変えたのでした。

【二一七頁 九行】（『地獄・餓鬼・畜生及び阿修羅あることなし』） その国には怒り（地獄）・貪欲（餓鬼）・愚痴（畜生）・争い（修羅）などの悪道に落ちている者は一人としていません。仏法を聞く心の無い者も一人もいません。そのような者は姿を消しました。 仏によって教化され清浄となった国々は宝石が大地を覆（おお）い、高さが五百由旬（ゆじゅん）もある宝石の木々が並んでいます。枝・葉・花・実が美しくなっています。さらにその木の下には宝石の獅子の座があり、高さは五由旬もあって様々な宝石・貴金属で装飾されています。

【二一八頁 一行】海や川、あらゆる山々はなく、見渡す限りひと続きの美しい平坦な大地で土地の境などなく、仏さまの智慧と慈悲があまねく行きわたった仏国土となっています。宝石を重ね合わせた幔幕（まんまく）があまねく張り巡らされ、美しい天蓋（てんがい）や旗が立てられています。お香のかぐわしい香りが周囲を包み、神々が降らした天の花々が大地一面に散りばめられています。

【二一八頁 四行】こうして十方世界から分身の諸仏が参集しましたが、分身仏（ふんじんぶつ）が着座する席が足りなくなったために、釈迦牟尼仏はさらに八方の二百万億那由他（なゆた）という数多くの国々を変じて清浄の国土とされました。そしてそこには同様に怒り（地獄）・貪欲（餓鬼）・愚痴（畜生）・争い（修羅）のような悪道はなく、仏法を聞く心の無い者は一人としていません。そのような者は姿を消しました。そして再び浄化された国々の様子は、先に伝えた仏国土と同様に大変美しい国々であります。

【二一九頁 一行】すると東方の百千万億那由他恒河沙（なゆた ごうがしゃ）という無数の国々で法を説いている釈迦牟尼仏の分身仏（ふんじんぶつ）が来集しました。／（『十方の諸佛皆悉（みなことごとく）来集（らいしゅう）して』） そしてついに十方世界のすべての分身仏が揃（そろ）い集まり、八方に分かれて着座されました。こうして全宇宙の一つひとつの方向にある四

百万億那由他という無数の国々に、諸仏を満ち渡らせたのでありました。

【二一九頁 四行】その時、宝樹のもとの獅子座に着座していた**十方の釈迦牟尼仏の分身仏**(ふんじんぶつ)は、それぞれが侍者として引き連れて来た大菩薩を釈迦牟尼仏のみもとに送り、ご機嫌伺いをさせることにしました。そして諸仏は宝石のように輝く美しく輝く花々、宝華(ほうけ)を侍者の大菩薩の両手に溢れんばかりに手渡し、つぎのように語りかけたのでした。

#### 【十方分身仏が釈尊の身を案じ、大菩薩にご機嫌伺いをしよう命ずる】——

【二一九頁 六行】「善男子よ。そなたたちは靈鷲山の釈迦牟尼仏のみもとに行き、／(『我が辞(ことば)の如く曰(もう)せ、少病少悩(しょうびょうしょうのう)、氣力安楽(けりきあんらく)にましますや』) 次のように私(十方分身仏)の言葉を伝えなさい。『釈迦牟尼世尊よ。お体を壊されることなく息災であられましようか。ご苦勞はございませんでしょうか。お健(すこ)やかでお心安らかでありますでしょうか。また菩薩や声聞の人たちも無事でありますでしょうか』と申し上げるのです。そしてその溢(あふ)れるほどの宝華(ほうけ)を世尊に捧げ散じ、次のごとくお伝えなさい。そして、『私が従うこれこれの仏が、この宝塔の扉を開いていただきたいと望んでおります』と、諸仏はそれぞれの侍者である大菩薩に申し付け、釈迦牟尼世尊のみもとへ遣(つか)わしたのでした。

#### 【十方分身仏の参集を見届け、釈尊が虚空(空中)に飛び立ち、宝塔の前へ】——

【二一九頁 終三行】すると**釈尊**は、来集したすべての分身仏がそれぞれ獅子座に着座していることを見届け、諸仏がみな同じように宝塔の扉が開かれることを望んでいることがお分かりになりました。／(『即(すなわ)ち座より起(た)って虚空(こくう)の中(なか)に住(す)したもう』)そして釈尊はやおら立ち上がり、スーッと空中に飛び上がり、宝塔の前におとどまりになったのでした。

それを目にした在家・出家の男女の修行者をはじめとする一切の衆生は、驚き感激で一斉(いっせい)に立ち上がり、一心に虚空の世尊を合掌して仰(あお)ぎ見るのでした。

#### 【釈尊が宝塔の扉を開け、『多宝如来』の姿を現わす】——

【二二〇頁 一行】空中の大宝塔に飛び上がった世尊は、／(『釋迦牟尼佛右の指を以て七寶塔(ほとう)の戸(とばそ)を開きたもう』) **右手で七宝(しっぽう)の宝塔の扉を開けられました**。すると巨大な城門が開くように、重々しい大音響が響き渡ったのでした。

その瞬間、すべての者たちの目に飛び込んで来たのは、宝塔の中の獅子座に端座する**多宝如来**のお姿で、深い禅定に入っておられるお姿が映し出されたのでした。

#### 【姿を現わした『多宝如来』が、釈尊の教えを聞くことの一大事を説く】——

【二二〇頁 四行】すると**多宝如来**が声を発せられました。

「善哉。善哉。ほんとうに素晴らしいことです。釈迦牟尼仏はよくそ**法華經**を説かれました。私はこの教えを聞くために、はるか遠くよりここにやって来たのであります」と仰せになる声が聞こえました。

その時、在家・出家の男女の修行者をはじめ会衆(えしゅう)の一同は、無量千万億劫というはるか昔の過去世に入滅した**多宝如来**のお姿を目(ま)の当たりにし、しかも、

釈尊を讃える多宝如来の言葉を直接聞いて、これまで経験したことのない不可思議な思いに包まれました。そして美しい天の宝華(ほうけ)を多宝如来と釈迦牟尼如来に捧げ散じて、供養申し上げたのでした。

【多宝仏が釈尊に半座を分かち。『二仏同坐・にぶつどうざ/二仏並坐・にぶつびようざ』】——

【二二〇頁 八行】すると獅子座の真ん中に着座していた / (『半座を分かち釈迦牟尼佛に與(あた)えて、是(こ)の言(ことば)をなしたまわく、釈迦牟尼佛此の座に就(つ)きたもうべし』) **多宝仏は、座を半分ずらし、釈迦牟尼仏に向かって『釈迦牟尼仏よ。どうそこの座にお着きください』とおっしゃられました。釈迦牟尼仏は直ちに宝塔の中に入られて、その半座に着かれ、結跏趺坐(けっかふざ)に足を組まれたのでした。**

【二仏同坐・にぶつどうざ/二仏並坐・にぶつびようざ】

【人々(会衆・えしゅう)が虚空(空中)の多宝塔に昇ることを願う】——

【二二〇頁 終二行】空中に浮かぶ宝塔の中の獅子座に並んでお座りになる**多宝如来・釈迦牟尼如来**の二如来の姿を拝した**人々(会衆・えしゅう)**は、心の中で次のように思いました。  
「仏さまはあのように高く遠い所におられる。私たちも如来の神通力で、虚空(こくう)のあそこまで引き上げて頂きたいものだ」と願ったのでした。

【法華経を弘め、久しく留まることを命ずる。『令法久住・りようぼうじゅう』】——

【二二頁 二行】その気持ちを察した**釈尊**は、すぐさま一同を神通力によって虚空へ引き上げられました。そして大音声(だいおんじょう)をもってお告げになったのでした。  
(『誰(たれ)か能(よ)く此の娑婆国土に於て廣く妙法華経を説かん。今正(いまま)しく是(こ)れ時なり』)「誰かこの娑婆国土に於いて、この妙法蓮華経を説き弘める者はいないか。今こそ、その時である」

【釈尊ご自身の入滅が間もないことを、重大宣告】——

(『如來久しからずして當(まさ)に涅槃に入(い)るべし』)「なぜならば、私は遠からずこの世を去ろうとしています。だからこそ、 / (『此の妙法華経を以て付属して在(あ)ることあらしめんと欲す』) この妙法華経を誰かに託し、しっかりと任せ、この教えをいつまでも引き続き存続させ、残すことを望むのです」と仰せになりました。

【令法久住・りようぼうじゅう】

【多宝如来の『因縁』を、釈尊が説明】——

【二二頁 六行】すると**世尊**は『偈』をもって重ねてお説きになりました。  
「真如の世界の主と讃えられる多宝如来は、はるか昔に入滅されたにもかかわらず、今、こうして法華経を聴聞されるために宝塔と共に出現されました。多くの人々よ。この多宝如来の尊いお姿を拝することができたのですから、 / (『諸人(しょにん)云何(い)かんぞ勤(つと)めて法の爲(ため)にせざらん』) 皆さんは、真理の教えのために一生懸命に努力精進せずにはおれないはずです」

【(偈)二二頁 八行】「多宝如来が滅度されて無央数劫(むおうしゅうこう)という無限の年月が経っていますが、多宝如来が時に応じ、必要に応じて出現し、法華経を聴聞されるため



にわざわざやって来られるのはなぜなのかと言え、それは法華經に出会えること自体が大変難しいからであります。法華經の教えを聴聞することはなかなかできない、得難い機会であるからです。／（『彼（か）の佛の本願は我滅度の後（のち）存在所往（ざいざいしよおう）に常に法を聴（き）かんが爲（ため）にせん』） そのために多宝如来の本願というものは『自分が滅度したあと、どのような所へでも法華經を聴聞しに行く』とされているのです。また、私の分身仏の数はガンジス河の砂の数のように無量無数ですが、これらの分身仏もこの得難い法華經を聞くためと、さらには多宝如来にお会いするために願ってここに集まって来たのです。分身仏は、自らが教化した美しい国から飛び出し、しかも多くの弟子や天上界・人間界の人々、そして龍神らから感謝と尊敬の供養を受けることを打ち捨てて、こうしてこの娑婆世界に集って来たのは、ほかでもありません。／（『法をして久しく住せしめんが故（ゆえ）に此（ここ）に來至（らいし）したまえり』）  
**法華經を永遠に残したいがためにやって来たのです**

【(偈)二二頁 二行】「来集した十方分身仏が、この座にしっかりとお留まりいただくために、神通力を以て真実の教えを聞こうとしない者を排除し、国土を清らかにしました。諸仏は宝樹のもとにお留まり頂き、涼（すず）やかな池一面に美しい蓮の花々が咲いています。諸仏の身から輝かしい光明が放たれ、あたたかも夜の闇の中で、大きな炬火（かがりび）を灯（とも）しているようです

【(偈)二二頁 六行】「参集した諸仏の御身（おんみ）からはかぐわしい香りが放たれて、その香りは十方世界に満ち満ちました。その香りのおかげで人々は言い知れぬ喜びに包まれました。強い風が吹くとすべての小さな木の枝がたなびくように、それぞれの仏が説く真理の教えによって、すべての人はみんな感化を受けたのでした。こうして法華經は永遠に残っていくのであります」

### 【(偈) 法華經を久しく留ませるを釈尊が命ずる『令法久住』】——

【(偈)二二頁 八行】「いまこそ皆さんに告げます。／（『諸（もろもろ）の大衆（だいしゆ）に告ぐ我が滅度（めつど）の後（のち）に誰（たれ）か能（よ）く斯（こ）の經を護持し讀誦せん今（いま）佛前（ぶつぜん）に於て自（みづか）ら誓言（せいごん）を説け』） 私がこの世を去ったのち、この法華經をしっかりと護持し、教えを讀誦して説き弘める者はいませんか。その者は今、私の前で誓願をしなさい」

【(偈)二二頁 九行】「そもそも多宝如来は、はるか昔に滅度されたのですが、法華經が説かれると必ず出現してそれを証明するという大誓願を立てられていました。そしてこうして今、この場に現われて、大音声（だいおんじょう）をもって法華經を証明されています。今、多宝如来と私、そして十方分身仏の三者がこの場にいる意味をかみしめ、／（『諸（もろもろ）の佛子等（ぶつしとう）誰（たれ）か能（よ）く法を護（まも）らん』） 【(偈)二二頁 終行】

**《令法久住①》** 『當（まさ）に大願を發（おこ）して久しく住することを得せしむべし』  
諸々の弟子たちよ、この法華經を未来永劫に残して欲しいものです。誰かいませんか。その人こそ、私と多宝如来と直に対峙し、供養する者です」

【(偈)二二三頁 二行】「重ねて言います。多宝如来が宝塔と共に十方世界のあらゆる所に出現されるのは、この法華經を聴聞（ちょうもん）するためであります。そして来集する分身仏のように諸々の世界を真理の教えによって光り輝かせる人たちを供養するためであります。もしこの法華經を人のために説くならば、それはすなわち私と多宝如来、そし

て分身仏を見ることの意味にほかなりません」

【『六難九易・ろくなん くい』の法門】——

【(偈)二二三頁 五行】「諸々の善男子よ。今、しっかりと思い定めなさい。／(『此(これ)は爲(こ)れ難事なり』) この教えを説き弘めることは非常に難しいことです。【(偈)二二三頁 六行】  
**《令法久住②》** (『宜(よろ)しく大願(だいがん)を發(おこ)すべし』) 確かな決定(けつじょう)をして大願を起こさなければなりません」

【(偈)二二三頁 六行】「《易(やす)き事①》世の中には様々な教えが、ガンジス河の砂の数のように無数にあります。それらの教えをすべて説くことは難事のように思うでしょう。しかしそれはまだ、たやすいことです。《易(やす)き事②》もし世界の中心にある、すべて大地を見下ろす巨大な山・須弥山(しゅみせん)を他の星へ投げ移すことは不可能のように思うでしょうが、これも簡単なことです。《易(やす)き事③》足の指でこの大千世界を遠い星へ蹴(け)り上げて飛ばすことなどできないと思うでしょうが、それは容易なことです。《易(やす)き事④》この地球の一番高い所に登って、全人類に法華経以外の無数の教えを演説することなど不可能だと思うでしょうが、それはやさしいことです。こうした事柄は、まだまだ容易(たやす)いことです。《難事①》(『若(も)し佛の滅度に 惡世の中に於て 能(よ)く此の經を説かん 是(こ)れ則(すなわ)ち難(かた)しとす』) しかし、私の滅度の後(のち)においてこの惡世で法華経を説くことの方が、はるかに難事であります。

【説教難・せっきょうなん】」

【(偈)二二三頁 終行】「《易(やす)き事⑤》ある人が大空すべてを手に取って、そして自由に飛び回るなど、それはできないと思うでしょうが、それは簡単なことです。《難事②》(『我が滅後に於て 若(も)しは自(みづか)らも書き持(たも)ち 若(も)しは人をしても書かじめん 是(こ)れ則(すなわ)ち難(かた)しとす』) しかし、それよりも私の滅後に法華経を自らの手で書き記し、そして人にも書かせることのほうがはるかに難しいことであります。

【書持難・しょじなん】」

【(偈)二二四頁 二行】「《易(やす)き事⑥》大地を足の甲(こう)の上にのせて、仏教の守護神が住む梵天(ぼんてん)の世界まで蹴(け)り上げることは難しいことではありません。《難事③》(『佛の滅度の後に 惡世の中に於て 暫(しばら)くも此の經を讀(よ)まん 是(こ)れ則(すなわ)ち難(かた)しとす』) しかし、それよりも私の滅後の惡世において、ほんのしばらくの間でも法華経を読むことの方がはるかに難事であります。 【暫読難・ざんどくなん】」

【(偈)二二四頁 四行】「《易(やす)き事⑦》もし全世界が焼かれる時代に、乾いた干し草を背負ってその大火の中に飛び込み、その干し草が焼けないでいることは不可能だと思うでしょうが、それは容易(たやす)いことであります。《難事④》(『我が滅度の後に 若(も)し此の經を持(たも)って 一人(いちにん)の爲にも説かん 是(こ)れ則(すなわ)ち難(かた)しとす』) しかし、私の滅度の後(のち)に法華経をたった一人のために説くことの方が、はるかに難しいことであります。 【説法難・せっぽうなん】」

【(偈)二二四頁 六行】「《易(やす)き事⑧》もし私が説いた八万四千(はちまんしせん)の教えを12分類して解説し、そのすべてを人々に説いて、六神通という素晴らしい神通力を具えるように導くことは大変難しいように感じるでしょうが、それは簡単なことです。

《難事⑤》(『我が滅後に於て此の經を聴受(ちようじゅ)して其(そ)の義趣(ぎしゅ)を問わん是(こ)れ則(すなわ)ち難(かた)しとす』)しかし、それよりも私の滅後においてこの法華經を聴聞して、その意義を徹底的に質問してそのうえで法華經を真に信受することのほうか、はるかに難事であります。【聴受難・ちようじゅなん】」

【(偈)二二四頁 九行】「《易(やす)き事⑨》もしある人が千万億無量無数というガンジス河の砂の数ほどの衆生に対して、人生でのすべての迷いを除きつくした阿羅漢(あらかん)という境地や、菩薩が具える六神通(神足通じんそくつう/天耳通てんにつう/他心通たしんつう/宿命通しゆくみょうつう/天眼通てんげんつう/漏尽通ろじんつう)という不可思議な神通力を持つように導くことなどは難しいことではありません。《難事⑥》(『我が滅後に於て若(も)し能(よ)く斯(か)くの如き經典(きょうでん)を奉持(ぶじ)せん是(こ)れ則(すなわ)ち難(かた)しとす』)しかし、それよりも私の滅後において、この法華經を心から敬い、しっかりと保つことの方がはるかに難しいことです。【奉持難・ぶじなん】」

#### 【六難九易・ろくなん くの法門】

【法華經こそ第一。法華經を説くことは仏が最も喜ぶこと】——

【(偈)二二四頁 終行】(『我(われ)佛道を爲(え)て無量の土(ど)に於て始(はじめ)より今に至るまで廣く諸經を説く而(しか)も其(そ)の中に於(お)いて此の經第一なり』)「私が仏の悟りを得てから今日まで、無数の国で数えきれない多くの教えを説いてきました。しかしそのなかで、法華經は最も優れた教えであります。諸々の善男子よ。私の滅後において／(『誰(たれ)か能(よ)く此の經を受持し讀誦せん』)法華經を受持し、讀誦する者は誰ですか。その者は、【(偈)二二五頁 四行】《令法久住③》(『今佛前(ぶつぜん)に於て自(みづか)ら誓言(せいごん)を説け』)今ここで誓ってください。／(『是(こ)の經は持(た)もち難し若し暫(しば)らくも持(た)もつ者は我即(われすなわ)ち歡喜(かんぎ)す諸佛も亦然(またしか)なり』)この教えを護持することは容易なことではありません。もしわずかな期間であったとしても、それを行うならば、私の喜びはこの上ないものです。諸仏も同様です」

【(偈)二二五頁 五行】「このような人こそ、諸仏からお褒(ほ)めを頂く人です。さらにこのような人こそ真の勇者であり、真の精進ができる人であり、仏の戒めを真に守る人であり、真に物欲から離れて無欲の生活ができる人です。ですからこのような人こそ、ただちに仏の悟りを得ることが出来る人です」

【仏滅後の未来世において法華經を實踐する者は、『真の仏子』なり】——

【(偈)二二五頁 七行】(『能(よ)く來世(らいせ)に於て此(こ)の經を讀(よ)み持(た)もたんは是(こ)れ真(しん)の佛子 淳善(じゅんぜん)の地に住するなり』)「未来世においてこの法華經を讀み、学び、實踐する人は、真の仏子です。そして清らかで純粋な境地にいる人でありま

す。私の滅度の後(のち)、この法華經を理解する人は、天上界・人間界の人々に本当の

ものを見方を悟らせることができます。そして恐ろしい悪世の未来世において、この法華経をほんの短い時間でも説く人は、天上界・人間界のすべての人から尊敬と感謝の供養を受けるでありますように」と、法華経を護持することがいかに尊く大切に偉大なことであるかを説かれ、人々に法を説く覚悟を促されたのでした。



### ほんもん おし たいどう 本門の教えの胎動

(P482・3行/P374・8行)

日蓮聖人は「宝塔品に事起（こと おこ）こり、湧出（ゆじゅつ）・寿量に事顕（こと あら）われ、神力・囑累（そくるい）に事竟（こと おわ）る」と言われています。すなわち法華経のなかで一番大事な「本門の教え」は、この『見宝塔品』において胎動を始め、『從地湧出品・如来寿量品』において顕現され、『如来神力品・囑累品』において結末がつけられるというわけです。

### ほうとう ぶっしょう しょうちょう 宝塔は仏性の象徴

(P377・3行/P290・8行)

この『宝塔』というのは、すべての人間にそなわっている『仏性』をさしているのです。～ 仏性はまぎれもなくわれわれの内にあるのです。煩惱と汚れに満ちたあさましい存在だと思っているわれわれ自身の中にあるのです。何も他にそれを求める必要はありません。ただ自分の中にあるそれを自覚すれば良いのです。

### 《愚性のひととき ①》

「仏性はすべての人間にそなわっている」と説かれています。— では私のなかに（自分自身のなかに）仏性がある。そのように信じているか？ かみ締めてみましょう。

『此の寶塔の中に如來の全身います』（二―四頁 終五行）

諸法実相を悟った立場から「人間の本質」をみますと、それはとりもおさず「仏性」でありますから、すべての教えは、自分のなかの仏性に目ざめ、他のすべての人の中に仏性を見出し自覚させ、それを開発してゆくというただ一事に帰するわけです。

### 《愚性のひととき ②》

仏さまの教えは「自分の仏性に目ざめ」、そして「他の人の仏性を見出し、それを高める」ことだと説かれています。— では私は、人の仏性を見出そうとしているか？  
つまり、他の人の良いところを見ようとしているか？ または、その良いところを「持ちよう」としているか？ 振り返ってみましょう。

### ぶん じん 分身

(P400・5行/P308・終2行)

真理の現われは自由自在なのであります。～ 尊い教えは、さまざまな聖者により、



さまざまな場所で説かれます。イエス・キリスト、孔子、ソクラテス・・・。

## なぜ、『一處に還し集めて』なのか

(P400・8行/P309・1行)

多宝如来がご自身のお姿をお見せになるときは、必ず全宇宙に散在している釈迦牟尼如来の分身(ふんじん)を呼び集めたうえで出現される・・・それはなぜでしょうか。～ 諸法の実相を説き、人間の本質は仏性であるとか法華経は、さまざまな聖者が説くあらゆる真理をすべて統合したものであり、真理の全(まった)きの相(すがた)であり、とりもなおさず《如来の全身》なのです。

ですから、『法華経を正しく説く』とは、『真理を統合した真如の教え』としてそれを説くことでもあります。～

したがって、法華経が真実であることを証明しようとするならば、どうしても宇宙全体に散らばっている真理の部分、部分を一か所に集め、統合した法華経とさせたうえでなければ、その真実も証明できないわけです。

『彼の佛の分身の諸佛十方世界に在して説法したもうを、盡く一處に還し集めて、然して後に我が身乃ち出現せんのみ』 (二一五頁 終三行)

## 他土へ置く

(P414・4行/P320・1行)

この説法の座にいるのは、真実の教えを聞こうと決意している人たちです。そういう人たちこそ、仏(多宝如来)を見ることが出来ます。～ すなわち仏の教えを聞こうとしない人びとは、そこに仏さまが充満しておられても、それを見ることはできません。

『唯此の會の衆を留めて、諸の天・人を移して他土に置く』 (二一七頁 二行)

## 仏さまをお迎えする

(P421・2行/P325・終7行)

仏さまの分身をお迎えするには、心を清らかにしなければお迎えすることはできません。いいかえれば、仏の教えを聞こうとするならば、この四つ迷い(四悪趣)におちている状態ではいけないということはもちろん、それらの迷いへ落ち込もうとするようなあやふやな状態(天・人)でなく、まったく澄み切った無我の心で、仏の教え(真如)を迎えなければならないのです。ですから、あやふやな状態の人は、他土へ置かれるのです。

## 《息惛のひととき ③》

“法を証明する”多宝如来を目にするためには、十方分身仏をお迎えしなければなりません。これは「四つの迷い(四悪趣)やあやふやな状態(天・人)でない。つまり『六道』の身ではなく、澄み切った無我の心でなければ、”法を証明する”ことはできない。という意味だと申せます。— このことを、あなたはどのように受け止めますか？

## 虚空に浮かぶことの重大さ

(P431・1行/P334・8行)

人間の本质は仏性なのだ、その仏性(人間の本质)を自覚し、開発しなければならないのだ— と教えられたところで、五欲の迷いに包まれている凡夫の身には、なかなかその実感がわいてきません。仏性というのは、現実を離れた高いところにある理想としか思われなないのです。～ お釈迦さまはご自分の身を宝塔の高さまでに飛揚させてお見せになりました。それは現実の人間でも、ちゃんとその理想の世界へ達することができるのだよ— と身をもってお示しになったわけです。

## 理と智と慈

(P432・6行/P335・終2行)

仏教では右は「智」、左は「理」を現わすとしています。  
「理」は真理であり道理。そして人間として大事なものは「理」を悟る「智慧」です。ついでですが、仏教では「理」と「智」の真ん中に「慈」を置いています。「慈」とは、仏性が自然に流れ出した純粋無垢な人間の感情です。そのほとばしりが、すなわち利他行の実践です。これがなくてはいくら「智」によって「理」を悟っても、人間は個人として完成せず、人類全体としても救われることはありません。そこで教えの中心に「慈」が置かれているわけです。～ 「理」と「智」と「慈」ががっちりとつながり合い、生き生きと循環して世間へと発動してこそ、初めて人間は個人的にも完成し、人類全体も救われ、この世に寂光土を建設することができるのです。

『釋迦牟尼佛右の指を以て七寶塔の戸を開きたもう』 (二二〇頁 一行)

## 《思惟のひとつとき ④》

『是(ここ)に釋迦牟尼佛右の指を以て七寶塔の戸(とばそ)を開きたもう』と、『証明法華(しょうみょうほっけ)の多宝如来』を人々にあらわすために、釈尊は「右の指」を使われました。— この「右の指」(右は『智』)を使われたことの意味を、どのように考えますか？  
考えてみましょう。

## 《思惟のひとつとき ⑤》

仏さまの教えの中心は「慈」である。そして「理・智・慈ががっちりとつながり合うことによつて人間は完成(人格完成)する」と庭野開祖は説かれています。— では私は、人に対して「慈悲(慈)」を大事にし、仏の教えを求よう(理と智を求めよう)としているか?  
日頃の姿勢を振りかえってみましょう。

## 真如に動きをあたえる

(P436・終4行/P338・終4行)

真如は人の心のなかへ動き出した時、はじめて救いとなるのです。

しん ぜん び ひょうげん かんち う  
**真・善・美は表現されてこそ価値を生む** (P438・終5行/P339・終2行)

「禅定に入った、動かないこの姿を、いくら拝んでも価値はないのだよ。私を真実の生命(いのち)として動き出せる釈迦牟尼如来の説法を聞くことこそ一大事なのだよ」と教えられているのです。このことをしっかりと領得(りょうとく)しなければ、この品を何度読んでも、読んだことにはならないと思います。

### 《息帷のひととき ⑥》

「動かない(如来の)姿をいくら拝んでも価値はない。大切なのは生きた行動を出せる釈尊の教えをしっかりと聞くこと」だと庭野開祖は説きます。— では、①動かない仏さま(仏像)だけを拝むという信仰と、②実践を説く釈尊の教えを頂き、その教えを実践するという信仰。果たして私の信仰姿勢はどちらですか? 振りかえってみましょう。

さんじんぶつ  
**三身仏**

(P440・2行/P341・3行)

- 「法身仏・ほっしんぶつ」真如(法) そのもの。宇宙の大生命そのもの。
- 「報身仏・ほうしんぶつ」真如(法) を人格化した仏。また真如がはたらき出した力。
- 「応身仏・おうじんぶつ」法身・報身の仏がこの世に現される人間としての仏。釈尊。

にぶつどうざ  
**二仏同坐**

(P443・4行/P343・7行)

第一に、釈迦牟尼如来は、人間釈尊ではなく、多宝如来と同じように生滅しながらも生滅しない仏である。第二に、法身の仏(多宝如来)と、応身の仏(釈迦牟尼如来)とは同格であり、そこに上下はない。すなわち「真如(法)」と「真如(法)を説く人」とは、同じように尊い存在であるという教えです。～

ですから、真如を知った者は、必ずそれ(真如・法)を人にも知らさなければなりません。真如を知りながら、それをひとり占めにするような根性は、～ もっともいやしむべき利己主義です。そのような人は宝塔の中に座る価値のない人であります。～

『二仏同坐』という尊い情景から、このような教えを強烈に感じ取り、強く、強く心に刻み込まなければなりません。

### 《息帷のひととき ⑦》

教えを知った者は、必ず人にも知らさなければなりません。それをひとり占めにするような根性は、最もいやしむべき利己主義。— この教え、かみ締めてみましょう。

ただねが によらい じんつうりき もつ わ ともがら とも こくう しょ  
『唯願わくは如来、神通力を以て我が等輩をして俱に虚空に處せしめたまえ』

(二二頁 一行)

理想の境地をあこがれ求める心が生じてきたわけです。～ いわゆる発菩提心であつて、さとりへの第一歩を踏み出したことになります。

にしよさんえ  
二処三会

(P448・終行/P347・終3行)

『**第一段階**』においては、現実のこの身をどうしたら安らかにすることができるか？ どうすれば苦から逃れられるか？— それには物事の本質を見通す「**智慧**」を養う、すなわち「この世の成り立ち、人と人との関係はどうあるのが正しいか？」が説かれている。

『**第二段階**』、「智慧」が身についてきたならば、いよいよ**理想の境地**が示さなければなりません。即ち「人間の真の救いは、久遠の本仏と一体になるところにある」「**すべての人がそのような境地に達してこそ、この世に寂光土が現出するのだ**」という教え。そして、**久遠本仏の大慈大悲を悟り、それに随順して一体となる**ことが教えられている。

『**第三段階**』、久遠本仏の大慈大悲に包まれているという「**悟り**」を、「**現実化**」「**生活への実践**」「**万人への普及**」こそが至上命題であると説かれている。

にしよさんえ ひび せいかつ  
二処三会を日々の生活にも

(P451・4行/P349・6行)

我々の日々の生活(一日の生活)にも、この通りに行なわなければ、意味はないのです。

『**第一段階**』・第一の**靈山会**・りょうぜんえ⇒ **智慧**を得る。(法を聞き、学んで智慧を養う)

『**第二段階**』・**虚空会**⇒ 仏の**慈悲**と一体となる。(ひととき三昧に入り、仏の慈悲と一体となる)

『**第三段階**』・第二の**靈山会**⇒ **智と慈**の実践。(高めた心をもって、現実の生活も高めていく)

この《**二処三会**・にしよさんえ》を、繰り返していかなければならないのであります。

『誰か能く此の娑婆国土に於て廣く妙法華經を説かん。今正しく是れ時なり。』

『如來久しからずして當に涅槃に入るべし』(二二頁 三行)

『佛、此の妙法華經を以て付嘱して在ることあらしめんと欲す』(二二頁 五行)

《**患難**のひととき ⑧》

法華經の展開の通り、「**①智慧**を得る。(法を聞き、学んで智慧を養う/この世の成り立ち・人と人の正しい関係)」を知る。「**②ひととき**仏の慈悲と一体となる。(仏の慈悲に感謝を深める)。「**③**そして**智と慈**の実践。(高めた心をもって現実の生活も高めていく)」を、日々繰り返していかなければならないと、庭野開祖は説きます。— さて、私の一日は如何ですか？

『諸の大衆に告ぐ我が滅度の後に誰か能く斯の經を護持し讀誦せん今佛』

『前に於て自ら誓言を説け』(二二頁 終五行)

早くも地上での実践を激励されています。誠に意義深いことでもあります。そして法華經を付属したい人を探しておられます。すべての人にこの聖業を背負ってもらいたいと願っておられます。

(P452・3行/P350・1行)



## りょうぼうくじゅう 令法久住

(P464・5行/P360・4行)

この偈(げ)のなかには「大願を起こせ」というお励ましを、三度もおおせになつておられます。～(護持の)《護(まも)る》というのは、ただ自分自身の心にしっかり植えつけて失わないというだけの意味ではありません。～他人に伝え、その人の心にも植えつけなければ、教えは永遠に存続しないのです。～《護る》とか、《護持する》という行ないのなかには、常に《他のために説く》という積極的な行ないもふくまれているのだと、しらなければなりません。

- ①『當に大願を發して 久しく住することを得せしむべし』(二二二頁 終行)
- ②『此は爲れ難事なり 宜しく大願を發すべし』(二二三頁 六行～)
- ③『自ら誓言を説け 是の經は持ち難し 若し暫くも持つ者は 我即ち歡喜す  
諸佛も亦然なり』(二二五頁 四行)

## ろくなんくうい 六難九易の法門

(P468・2行/P363・3行)

常識ではとてもできそうにない九つの難事をお説きになり、(その上で)法華經を受持し、他人のために説く行を六つに分けて、(これこそが本当の難事である)とお説きになられています。これを『六難九易』の法門といいます。

- 『説經難・せつきょうなん』 悪世において法華經を完全に説くことの難しさ
- 『書持難・しよじなん』 法華經の真意を正しく解説し、心から信受することの難しさ。
- 『暫読難・ざんどくなん』 法華經を全身全霊でほんとうに読むことの難しさ。
- 『説法難・せっぽうなん』 たった一人の人に、教えをしんから納得させることの難しさ。
- 『聴受難・ちやうじゆなん』 教えの神髓である仏性の自覚と、他人の仏性を見ることの難しさ。
- 『奉事難・ぶじなん』 教えを単に理解するだけでなく、長く身を以て保つことの難しさ。

『若し能く持つことあるは 則ち佛身を持つなり』(二二五頁 二行)

法華經の教えによって仏性を悟った人は、その人自身が仏身となるわけです。まことに尊く、ありがたいことです。(P483・3行/P375・3行)

## 《息惛のひととき ⑨》

「法華經の教えによって仏性を悟った人は、その人自身が仏身となるわけです」  
— この庭野開祖の言葉をかみ締めてみましょう。  
※「仏性を悟る」人は、釈尊の分身仏。

## ほんとうの意味での精進とは

(P486・2行/P377・6行)

『是れ則ち精進なり 是れを戒を持ち 頭陀を行ずる者と名く』 (二二五頁 六行)

『われ』・『ひと』共に救い、世界を真の平和境にするという大目的のために献身し、努力することです。法華經の教えを受持し、実践するのは、そういう大目的のためでありますから、〈『是れ則ち精進なり』〉なのであります。

『能く來世に於て 此の經を讀み持たんは 是れ真の佛子 淳善の地に住するなり』

(二二五頁 終四行)

『佛の滅度の後に能く其の義を解せんは 是れ 諸の天・人世間の眼なり』

(二二五頁 終三行)

『恐懼の世に於て 能く須臾も説かんは 一切の天・人 皆供養すべし』(二二五頁 終二行)

## 《愚惟のふいかえり まとめ》

今日の『見宝塔品第十一』の学びを通して、何を学び取ったか？  
(または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか?) 振りかえってみましょう。

合 掌